

帝國主義

F. HATTORI  
No.

文部省撰定教育ノート大學高專用



レーニン

## 帝國主義と社會主義の分裂

社會愛國主義と日和見主義が、ヨーロッパの労働運動の上に獲得した  
恐るべき異常の勝利と、帝國主義との間には、連繫があるのであろうか？

これは現代の社會主義の根本問題である。而して吾々、吾々の文献の中に  
規定にないような、第一、吾々の時代及び今日の戦争の帝國主義的性質、  
第二、社會愛國主義と日和見主義との不可分の歴史的連繫、同じくまた  
兩者の様な觀念の政治的内容を規定した後は、吾々はこの根本問題  
の分析に移ることになる、また移らねばならぬ。

先ず帝國主義の出来るだけより正当な、より完全な定義から始めなければならぬ。帝國主義は、資本主義の特殊の歴史的段階である。この特殊性  
は三様である。(1) 帝國主義は、独占の資本主義であり、(2) 寄生の資本主義  
或は腐爛し始めた資本主義であり、(3) 死滅しつつある資本主義である。  
自由競争と独占との交替は、帝國主義の基本的な経済的特徴であり、本質である。  
独占資本主義は、五つの主要の形態の中に現われる。(1) カルテル、  
シンジケート及びトラスト。生産の集積はこれらの独占の資本家同盟を生み出す  
ところにより到達した。(2) 諸大銀行の独占的地位。三乃至五の巨大な  
銀行が、アメリカ、フランス、ドイツの全経済生活を動かしている。(3) トラスト及び  
金融寡頭政治による原料資源の占領(金融資本は、銀行資本と融合せる  
独占主義的産業資本である)。(4) 国際カルテルによる世界の(経済的)分  
割は開始されている。世界の全市場を掌握し、それを、仲介して分配している  
のは国際カルテル——戦争は、まだ今のところ、この世界の全市場を再分  
割していない——は既に百以上を算する。資本輸出は、非独占の資本主義  
の下に於ける商品輸出とは異なる特殊の特色の現象であるか？この資本輸出は、  
世界の経済的及び政治的＝領土的分割と密接に關聯している。(5) 世界  
(植民地)の領土的分割は完了している。

欧米、次にアジアに於ける資本主義の最高段階としての帝國主義は、  
1898—1914年に完成している。米西戦争(1898年)、ボア戦争(1900—  
1902年)。



日露戦争(1904—1905)及び1900年の歐洲に於ける經濟恐慌——  
これらは、世界史上の新時代の重要な歴史の標識である。

帝國主義が寄生的資本主義、或は腐爛した資本主義であるといふ  
こと、これは先づ第一に腐爛化の傾向の中に現われるものであつて、この傾  
向は、生産手段の私有制の下に於ける日ゆる独占と緊密な連関を有する。共  
和政=民主主義のブルジョアと、君主制=反動は、帝國主義のブルジョ  
アと傾向の差異は、兩者が生ずる腐爛化することによつて抹消され  
ている。(この腐爛化によつて個々の産業部門、個々の国、個々の時代に於ける  
資本主義の積極的な急速なる發展は毫も排除されるのではない)。第二に、  
資本主義の腐爛化は、金利生活者、即ち「利根を以て生活する資本  
家の巨大なる社會層の成立の中に現れる。四つの進歩せる帝國主義は、  
即ち、イギリス、北アメリカ、フランス、ドイツに於ては、有価証券における資本  
は、100ミリアルト乃至150ミリアルト(1ミリアルトは10億—譯者)フラン  
となつてゐるが、これは一ヶ月前の年収入が5乃至8ミリアルトを下るに  
なつてゐることを意味する。第三に、資本輸出は、自棄された寄生生活である。第四に、  
金融資本は、支配を目指し、自由を目指さない。金融に與る政治的  
反動は、帝國主義に固有なものである。買収、大規模の賄賂、あらゆる  
種類の不正な運河事件。第五に、他国土の併合と不可分離な關係にある被  
圧民族の搾取、特に一握りの「大強」に依る植民地の搾取は、益々  
「文明世界」を化し、数億の「非文明」民族の身体に附着せる寄生虫  
たらしめる。ローマのプロレタリアの生活費は、ローマ社會が背負つてゐた。  
現代の社會の生活費は、現代のプロレタリアを背負つてゐる。マルクスは  
「スモンチ」のこの深刻なる指摘を特に強調した。帝國主義は、事態を  
幾分か変へてゐる。即ち帝國主義の列強の「プロレタリア」の特権的  
社會層の生活費の幾分は、数億の非文明民族が背負つてゐる。

何故に帝國主義が、社會主義へ推移する所の死滅しつゝある資本  
主義であるかは明白だ。資本主義の中より生長する独占は、既に資本主義の死  
滅化であり、社會主義への推移の端緒である。帝國主義に依る労働の

巨大なる社會化(これを解説者即ちブルジョア經濟學者は「交錯」と呼んで  
ゐる)も同じ事を意味する。

帝國主義のこの定義を掲ぐる時、吾々は、カール・カウツキーとは全く対  
立することになる。彼は、帝國主義の中に「資本主義の段階」を見ることを拒け、  
帝國主義を規定し金融資本の「選出とこの政策」、農業の併合せんとする  
工業の熱望としてゐる。\* カウツキーのこの規定は、理論的に徹頭徹尾  
欺瞞である。帝國主義の特性は、正に産業資本の支配ではなく、金融資本  
の支配であり、正に農業のみを併合せんとする熱望ではなく、日ゆるを併合  
せんとする熱望である。カウツキーは、「軍備撤廃」、「超帝國主義」及びこれに  
類したインセルスの如き自己の平板なるブルジョア改良主義の道を清めるため  
に、帝國主義の政策を、その經濟より切り離し、政治に於ける独占主義を  
至極に於ける独占主義より切り離してゐる。この理論的欺瞞の意味及び目的は、  
帝國主義の最も深刻なる諸矛盾を抹殺し、以て帝國主義の弁明者、即ち  
公然の社會愛國主義者及び日和見主義者と「提携せよ」といふ理論を正当  
化することにある。

マルクス主義とカウツキーのこの不一致に就いては、吾々は「ヤフピル  
デモクラット」誌に於ても、「コンミューニスト」誌に於ても、既に充分に論じて置  
いたところである。吾々がカウツキー主義者、即ちアクトールとスペ  
クトールを戴く「組織委員會」派——マルトフとその仲間一人であり、トロツキー  
も大体そうである——は一傾向としてカウツキー主義の問題をむしろ黙殺し  
消さうと欲した。彼らは、カウツキーが戦争時代に書いたものを擁護すること  
を恐れた。そして時にはカウツキーを單に禮讃することに依つてお茶を濁し、(ア  
クトールは自著のドイツ語パンフレットの中心としてゐた。このパンフレットは組織  
委員會がこれをロシアに出版することと約束してゐる)時々カウツキーの  
私信を持ち出してお茶を濁してゐる。(スペクトールがそうだ)。カウツキーは  
この手紙の中に、自分かオポズィションに所属してゐることを保証し、自己の  
愛國主義的声明を取り消すことをイサリスト派に要求してゐる。

吾々は、カウツキーが、帝國主義に対する「理解」——それは帝國主義



の進歩に等しい——の裏に於ては、ヒルフ・デングの「金融資本」に於  
て退歩している許りなく（如何にヒルフ・デング自身も、今、熱心にカウ  
ツキを弁明し、社会愛の主義者との提携を弁明していることか！）社会  
自由主義者、セ・エ・ホブソンに於ては退歩していることを注目したい。マルク  
ス主義者と自称する希望を少しも持っていないこのイギリス経済学者ホブソン  
は、1902年出版の自著に於て、遙かに深刻に帝国主义を規定し、その  
諸矛盾を解剖している。\*\*\* この著述家（彼はカウツキの有する殆んど  
すべての平和主義的並に、妥協的「平和性」を禁じられる）は、帝国主义  
の寄生生活に關する特に重要な問題に就いて次の如く書いてゐる。

★「帝国主义は高度に繁栄せる産業資本の所産である。帝国  
主義は、凡ゆる工業の資本主義に隷屬せしめ、居住民の如  
何なるものかを問はず、益々多くの農業地方を併合せんと  
する熱望である。」（カウツキ、「Neue Zeit」11, IX, 1914）。

\*\*\* J. A. Hobson, "Imperialism", London, 1902.

ホブソンの意見に依れば、次の二種の事情が旧帝国の力を殺いたこと  
になる。（1）「経済的寄生生活。」（2）隷屬民族より成る軍隊の編成。  
★第一の事情は、普通の経済的寄生生活である。支配国家は、この経済的寄生生活  
に依つて、そのプロビンス、植民地、及び隷屬国を利用するのである。これは自  
国内の支配階級を富裕にし、下層階級を買収し、何時までも温順にしておいた  
のである。★第二の事情に就いては、ホブソンは次のように書いてゐる。

★帝国主义の盲目性の最も不思議なる徴候の一つは（社会自由主義者  
ホブソンの如くは帝国主义者の、盲目性の歌調は、マルクス主義者カウツキ  
におけるよりも時宜を得ている）大ブリテン、フランス及び其他の帝国主义に於  
て此道を進む場合の不注意である。大ブリテンは此矣と最もひどい。印度帝国  
を吾々が征服した時、其戦力の大部分は、土人より成る軍隊に依つてなされ  
た。印度に於ては、また最近のエジプトに於て、大常備軍はイギリス人の指  
揮の下に在る。南アフリカを除いた以外のアフリカの政略は南緯の殆んど総て

の戦争は、土人が吾々のためにやったのである。

★その分割の予想は、ホブソンに於て次のような経済的評価をなした。  
★その時、西欧の大部分は、これらの一部、即ち南部イギリス、リウエラ、  
イタリア及びスペインの最も観光客の多い、そして富豪の居住地になつてゐる地方が、  
目下、示しているような姿容と性質をとるかも知れない。即ち配当金と年金と遠く  
遠く東洋から手に入る極く少数の富裕貴族と、それより若干多い事務員と商人の  
グループと、更に多数の家僕及び運輸業や精工業に従事する労働者を生ずること  
になるかも知れない。またその時、主たる産業部門は消滅するであろう。  
そして多量の食糧品や半製品は、アジア及びアフリカから貢物として流入するであ  
ろう。★西洋諸国によつて一層広汎なる同盟、即ち大強国のヨーロッパ聯邦  
は、どのような可能性を吾々の前に展開している。即ちこのヨーロッパ聯邦は、  
世界文明の事業を進歩せしめない許りなく、更にそれは西洋の寄生生活の大きな  
危険性を意味するかも知れない。即ちそれは進歩せる工業の一群を分岐せしめ、  
これらの工業の上層階級は、アジアやアフリカから多大の貢物を手に入れ、そして  
それは農工業品の大量生産に従事せしめ、新しい金融貴族のコントロールの下に  
他人の奉仕や半二義的工業労働に従事している何れかの多数の使用人や家僕と、  
この貢物によつて養うかも知れないのである。ある理論（これは理論と名付  
けずに予想といふべきであろう）を一顧だに値しないものとして一蹴せんとする人々  
は、既に在る状態の中に導き入れられてゐる今日の南部イギリス地方の経済  
的、社会的状態を考察すべきである。嘗て世界に知られてゐた最大の底知れぬ富  
源から利潤を汲み取り、この利潤をヨーロッパで消費せんとするある金融資本  
家、投資家（金利生活者）及び彼らの政治上並に商工業上の使用人の一群の  
経済的コントロールの下に支配が置かれる時、ある体制が如何に広大に拡大  
されるかをよく考へべきである。かように未来はたゞこうなるのだと断言して、  
それは蓋然性を持たせようとすると、もちろん、事態は余りに複雑であり、世界列  
強の芝居はこれを計量するには余りに困難である。だが今日、西欧の帝国主义  
を支配している諸勢力は、この方向に進んでゐる。若し反作用にも遭遇せず、他の方向  
へも外されぬならば、この諸勢力は、過程の完成をどのようにするやうに働くであろう。



社会自由主義者ホブソンは、革命的プロレタリアートの「反作用」を示し得ること、而も社会革命としての「示し得る」ことを看取してゐない。この点に於て、彼は社会=自由主義者だ！ だが彼は既に1902年に「ヨーロッパ合衆国」（カウツキ-主義者トロツキ-の矢張り「<sup>この</sup>ことだ！」）の内部及び主義に立派に到達してゐた。彼は、いろいろの「虚飾のカウツキ-主義者」が糊塗してゐる事實、即ち日和見主義者（社会愛国主義者）が、帝国主义プロレタリアと協力して、アジアとアフリカを踏台にした帝国主义ヨーロッパを作らんとしてゐること、また客観的に見れば、日和見主義者とは、帝国主义の超利潤によつて買収されて、資本主義の番犬、労働運動の攪乱者としてゐる小プロレタリアー及びある労働階級層の一部であること、これに内なる問題と意義に到達してゐたのである。

吾々は、現今、労働運動を征服してゐる（それは永くそうであろうか？）日和見主義と帝国主义プロレタリアーとの、この最も深刻なる経緯的連繫と、論文の中許りでなく、吾々の決闘の中でも、何回となく指摘して来た。吾々は、この連繫の中から、就中、社会愛国主義との分裂の不可避性を導き出した。吾々カウツキ-主義者は、むしろ問題を避けようとした。例えば、マルトフは、既にその報告の中、詭弁を弄してゐるか？ この詭弁は「組織委員会外セクレタリー」の報告（1916年4月10日発行、第4号）には次のように表現されてゐる。

「……革命的社会民主主義の事業は、もて智識繁達の実から見て、インテリゲンチヤに最も近くて最も有能適任なる労働者グループが、宿命的に革命的社会民主主義を去つて日和見主義に迷ふならば、甚だすまいものとなり、引いては絶望と云ふであらう。」

これは、労働者の或る層が日和見主義及び帝国主义プロレタリアーの方へ走つたという事実か？ 愚にもつかぬ、宿命的という言葉及び或る「誘魔仕」に依つて回避されてゐる！ 組織委員会派の詭弁家は、この事実を回避しさえすればよい！ 彼は、只今、カウツキ-主義者ヒルファ-ティンク及びその他々々、依つて以て誇示してゐる「官許樂觀主義」を以てお茶を濁してゐる。曰く、客観的條件はプロレタリアートの統一及び革命的汐流の勝利を保証してゐる！ 曰く、吾々はプロレタリアートに就いては「樂觀主義者」である！ と。

ところが、その裏、これらすべてカウツキ-主義者、ヒルファ-ティンク、組織委員会派、マルトフ-派は、日和見主義に依つて樂觀主義者を演じてゐる。この裏に本質がある！

プロレタリアートは、ヨーロッパ資本主義及び帝国主义資本主義の子供である許りでなく、また世界資本主義の子供である。世界の規模に於ては、五十年早からうか五十年遅からうか——（この世界の規模の見地から見れば、問題は部分的である）勿論プロレタリアートは統一せられるで「あう」？ として革命的社会民主主義は、然らうの中に「不可避的」に勝利を得るであらう。カウツキ-主義者諸君よ、問題は、この裏にはまゝで、諸君が只今、ヨーロッパの帝国主义に於て日和見主義者として阿諛してゐるところに在るのだ。彼は日和見主義者は、階級としてのプロレタリアートには無縁である。彼は、プロレタリアートの勢力の奴僕であり、代案者であり、先導者である。彼は4 解放されぬ限りは、労働運動は、依つてプロレタリアの労働運動である。日和見主義者、レーギン及びタビート、アムス、或はチンケル及びボトレイフらと一致せよという諸君の説法は、客観的に、帝国主义の「プロレタリア」が労働運動に於ける優秀な代案者を通じて労働者を奴隷化してゐるを擁護することである。世界の規模におけるXX的社会民主主義の勝利は絶対に不可避である。だがこの勝利は、諸君に反対してのみ進むのである、また進むであらう。この勝利は、また諸君に反対してのみ発生する。また発生するであらう。またこの勝利は諸君に対する勝利となるであらう。

1914—1916年に、全世界に於て、あつたように明白に分裂した二つの傾向（現代の労働運動に於ける）、否、二つの党派は、概略1858年より1892年までの数十年間、イギリスに於て、マルクス、エンゲルスによつて考察せられた。

マルクスも、エンゲルスも、1898—1900年以後に初めて現れた世界資本主義の帝国主义時代まで生き延びてゐた。だが少くも帝国主义の最も大きな二つの特徴が、イギリスに現れてゐたことは、既に19世紀の中葉よりイギリスの特性であつた。(1) 無限植民地。(2) (世界市場に於ける独占的地位より結果する) 独占利潤。これが二大特徴である。此二つの点に於ては、イギリスは、当時、資本主義諸国間の除外例であつた。エンゲルスは、マルクスと共に、此除外例を分析して、それがイギリス労働運動に於ける日和見主義の（一時的）勝利と関係あることを全く明白に決定的に指摘した。



エンゲルスは、1848年10月4日付のマルクス宛の手紙の中で書いていた。  
「イギリスのプロレタリアートは、事実、益々ブルジョア化している。だからあらゆる国  
民の中でこの最もブルジョア的な国民は、という話には、ブルジョアの貴族を持つ  
ブルジョアジーと伍するブルジョア的プロレタリアートを持つところまで行こうと欲して  
いるようである。もちろん、全産業を搾取している国民にとつては、このことは、ある程  
度まで分相応なことである。」1842年9月21日付のゾルゲ宛の手紙では、エンゲルス  
は、ハース(Haas)がインタショナル聯合委員会で大いに悪口誹謗を逞げ、  
イギリス労働者の首領達は買収された」というマルクスの言葉に対して、マルクスを  
譴責するにとり賛成したことと報いている。マルクスは、1844年4月4日付のゾルゲ  
宛の手紙の中で書いていた、「この(イギリス)都市労働者についていえば、その首  
領の悪党団がすべて議會に入らなかったことを遺憾とせねばならぬ、これらこの悪  
党共々解放される最も確実な方法であろう」と。エンゲルスは、1881年8月11日付  
のマルクス宛の手紙では、「ブルジョアから買収されている人間、或は少くともそれ  
から給料を貰っている人間に甘んじて指導される極悪の労働組合」について語って  
いる。尚ほは1882年9月12日付のカウツキー宛の手紙では、こう書いていた。「貴  
君は、植民政策に関するイギリス労働者の意見を私に質問しているが、それは、政  
治一般に関する彼らの意見と同じである。イギリスでは、労働者は否、ある  
ものはたい保守的及び自由主義的急進派に過ぎない。労働者はイギリスの  
植民地独占と世界市場独占、とこれらの急進派と共に極めて安樂に享樂している。」

1889年12月4日に、エンゲルスはゾルゲに書いていた、「この(イギリス  
で)最も気味悪いことは、労働者の肉と血に浸潤しているブルジョアの体面  
(respectability)である、……私からすればこの人の中で最も立派な人物と見做して  
いるトーマンでも、ロンドン市長と会食するのを得意にしている。これと  
フランス人とを比較して見れば、革命が何を意味するかが分る。」1890年4月19日  
の手紙には次のようにある。「運動(イギリス労働者階級の運動)は地下で進行し、  
益々広汎なる層を獲得し、而も今更なる動かされた最も下層の大衆(エンゲルスの  
傍書)の大部分を獲得している。この大衆が自分自身を築き上げる時期、大衆自身  
がこの巨大な動の大衆であるというところ、大衆は明かにある時期、という時期は、

もはや遠いことではない。」1891年3月5日付の手紙には、「瓦解したドック工組合  
が失敗し、旧式の、保守的な、金の多い、そしてそのために怯懦な労働組合  
のみな戦場に取られ残されている」と述べている。……1891年11月14日の  
手紙には次のようにある。労働組合ニユースカッスル大倉に於ては、旧い労働組合  
主義者、即ち8時間労働日の反対者は屈服せしめられた、そしてブルジョア新聞  
はブルジョアの労働者達の敗北を承認している」と。(エンゲルスの傍書)。

数十年間に反覆されたエンゲルスのこれらの思想が、而も公然と出版  
物の中で發表されたものであることは、「イギリスにおける労働階級の状況」  
第二版の序文がこれを証明する。この序文では、「労働階級に於ける貴族」について  
語られ、「広汎なる労働者大衆」に對立する「少数の特権的労働者」について語ら  
れている。曰く、労働階級中の、「身分毎泰然と僅かの特権の少数者」のみが、  
1848-1868年に於けるイギリスの特権的地位より生ずる「永続的利益」を握つて  
いた。曰く、「広汎なる大衆は、精々短期間の間この地位を改善され利益を  
得たに過ぎない」……イギリスの産業上の独占が崩壊すると共に、イギリス労働  
階級は、自己の特権的地位を喪失するであろう……曰く、「新しい労働組合  
の會員、即ち不熟練労働者組合の會員は、」



1870-1871年以降大國の國際政策における(最主要の)危機:

1914~6年戦争の  
準備(「道標」)

1849 = 独墾同盟

1891 = 露佛同盟

1904 = 露英同盟

- 明治10  
4.11. 1844-1848 = (バルカンにおける民族諸口家の解放)。トルコを  
掠奪す(「分割す」)(ロシア+イギリス+オーストリア)。
- 明治18  
明治28  
4.31. 1885 = 露英戦争間一撃に迫る。中央アジアを掠奪す(「分割す」)(ロシア+イギリス)。  
4.34. 1895 = 中日戦争。中口を掠奪す(「分割す」)(日+露+英+独+佛)。  
4.38. 1898 = 英佛戦争間一撃に迫る(「アシアタ」)。アフリカを掠奪す(「分割す」)。  
4.44. 1904-5 = (露日戦争)。中国及び朝鮮を掠奪す(「分割す」)(露と日)。  
1905 = 独対佛英戦争間一撃に迫る。エジプトを掠奪す(「分割す」)。  
4.44. 1911 = 独対仏英戦争間一撃に迫る。エジプトを掠奪す(「分割す」)。(エジプトを)  
1891. 1月10日 = 英。葡。に対する最後通牒 = アフリカを掠奪す(「分割す」)。  
1899 = ケニア群島の掠奪(英。独。及。北米合衆国共同して)。  
1898 = 西米戦争。(キューバ及びフィリピンを掠奪す)。  
1898 = 英は露に對抗する同盟に内し独と交渉す。(交渉不調に了る)。(「備える」)  
明治31  
4.32. 1898. 10月 = 英独協商 = 葡の植民地を分割す(葡の財政的困難に因り)。  
4.32. 1899 = ケニアに原水。独。英。米。向。確執。戦争の脅威。新島。29群島  
分割に因する協商 = 1899. 11月14日。  
明治33. 1900 = 列口共同して中口を圧迫す。独+露+米+日+英+佛。  
4.36. 1903 = ユネツエラより負債を強制徴収す(砲撃) = 独+英+伊。  
4.37. 1904 = 英佛協商(4月8日) = アフリカを分割す(対独戦争の準備を)  
4.40. 1904 = 露英協商(8月31日) = アフリカ。アフリカ。アフリカ。分割す(対独戦争の準備を)。  
4.41. 1908 = 太平洋における兩國の領域保障に因する日米協定(11月28日)。  
4.43. 1910. 年 = 露日協商成立 = 朝鮮と蒙古とを交換。  
4.44. 1911. = 露独協商(8月19日) = これ亦一種の「再保障」(バルカン)。  
1911 = 英日協商(英日米戦争の場合中立)。(「フランク」)。(「フランク」)。(「フランク」)。  
大正3. 1914年9月14日 = ロシアと「独立」蒙古とを「協約」(蒙古を掠奪す)。(「フランク」)。(「フランク」)。(「フランク」)。



B 列五番正四十枚 足利・足利紙工株式會社製造  
④六番小賣業者販賣價格 二〇・七〇圓  
(23/2)